

論文

グレードシステムを用いたピアノ演奏・表現向上の試み
—保育者養成校における指導法に関する一考察—

扶 瀬 絵梨奈

1. 問題と目的

保育者養成校におけるピアノの演奏技術に対する指導については、これまで様々な視点から教授方略 (Instructional Strategy) が練られてきた。無論、幼児教育・保育の場において子供の音楽表現を支える方法はピアノのみに限らないことは言うまでもないが、吉村 (1993) が示しているように、保育者の音楽的技術が優れていることは、それだけで子どもたちの豊かな音楽的環境となれることから、ピアノ実技の含まれる科目は、必修科目あるいはそれに準ずる科目として位置づけられていることが多い。しかしながら、ことに短期大学の2年間の養成課程においては、限られた時間の中で教授しなければならないことをはじめとする多元的要因と、年々増加するピアノ初学者の割合に対する教授方法の難しさは近年ますます深刻化している。

田原 (2015) は、「幼稚園教育の現場に必要なピアノ伴奏は、領域「表現」に直接的にかかわりがあるだけでなく、他の領域すべてとかかわりを持ち、子供たちの多様な活動を支え、子供たちの心情、意欲、態度に貢献する必要がある」と述べている。子どもの生きる力を支えるための手段として他領域にわたり結びつきのあるこの技術習得は、重要な位置を占めると考える。本学は121年の歴史の中で、長きにわたり音楽技能の高い保育者を輩出していることを評価されてきたが、ピアノ学習人口の減少という時代の流れに洩れず入学時におけるピアノ初学者の割合は増加の一途をたどり、2019年度入学者では全体の4割におよぶ。入学手続き者を対象とした入学前講座や、オープンキャンパス内での初学者向け講座において入学前教育に力を入れ実施しているところであるが、榎内ら (2011) が示唆しているように、モチベーションを維持しながら短期間で技術習得しなければならない実態は学生自身にとって苦しいものと感じられることも多く、その学生を指導し、技能を育成していく周りの教員にとってもそれは容易なことではない。本学においても、初学者が幼児教育・保育の現場で生かすことのできるピアノ技術を習得できるための学習時間が確保されているとは言い難く、1人あたりの指導時間は10分未満というのが現状である。

平成 22 年の保育士養成カリキュラムの改正を受けて教科目「基礎技能」は「表現技術」へ、また平成 30 年の改正によって「表現技術」に代わり「保育内容の基礎と演習」が設置されたが、そもそも基礎技術なくして達成できる手段は成立しない。国内の保育者養成校で開設されている音楽関連科目のうち、ピアノの演奏技術を習得するための科目を概観すると、バイエル等のいわゆる「教則本」で基礎技術を身に付けたのちに、子どもの歌の弾き歌い曲を学習したり、教則本は一切学習せず弾き歌い曲のみを学習したり、その学習方法についてもグレード制を用いていたり、全員同じ課題（曲）を学習していたり、各養成校のカリキュラム内で様々な工夫がなされていることが分かる。しかしながら、「教則本の学習曲」も「子どもの歌の弾き歌い曲」も、決してそれぞれが独立しているものではなく、相互に作用していると筆者は考える。最も重要なことは、学生がそれらの結びつきや意義を実感しながら学習できることではないだろうか。

以上のことから本稿では、音楽の基礎演奏技術と表現技術を分け隔てることなく、同時進行的に習得するための教授方略を検討することを目的とする。効率的に、かつ、学生の学習意欲が高められながら達成される教授方略の可能性を探っていきたい。

2. PDCA サイクルを活用した、14 段階グレードシステム

本学において、「音楽Ⅰ」および「音楽Ⅱ」は複数の中間科目から成っており、その詳細は以下のとおりである。

表 1. 2019 年度「音楽Ⅰ」「音楽Ⅱ」教育課程

科目名	授業形態	配当年次	単位数	資格区分	
				幼稚園教諭	保育士
音楽Ⅰ（ピアノ）	演習	1 年通年	2 単位	必修	必修
音楽Ⅰ（声楽）	演習	1 年後期			
音楽Ⅰ（理論）	演習	1 年前期			
音楽Ⅱ（ピアノ）	演習	2 年通年	2 単位	選択	選択
音楽Ⅱ（幼児音楽）	演習	2 年通年			

音楽教育の効果的な方法について、吉村（1993）は「音楽的環境に恵まれること」、「よい指導者にめぐり合うこと」、「効果的な教育システムが確立しており、なおかつ個人に応じたプログラミングの工夫がなされていること」の三つの条件が必要であると述べている。これらが満たされた上ではじめて、最大限の学習成果が得られるのである。そこで、学生が見通しをもって学習できること、またその学習成果を獲得できることを目的とし、本学

の音楽Ⅰ（ピアノ）では長きにわたりグレードシステムを活用し、教育している。音楽Ⅱは選択科目であるが、9割を超える学生が履修している。これは、グレード制を用いた目標設定→自己学習（練習）→習熟度の確認・評価→振り返りといったPDCAサイクルが1年次の間に確立されていることが効果を生み出していると考えられる。また、1年次を対象としたフォローアップ講座として、本学の独自講座である音楽Ⅰ（ピアノ補習）も2008年度より開講され、進度に不安を抱えているもしくは遅れている学生は練習の習慣を身に付けながら、担当教員による指導を受け演奏技術の問題を解決できる環境を整えている。グレードの幅や学習曲の中身は、在籍する学生により年々改良しているが、2019年度入学者に対する14段階のグレードシステムの内容は、以下の通りである。

表2. 名古屋柳城短期大学ピアノグレード課題学習カード

グレード	テキスト	学 習 曲	弾き歌い レベル
1	バイエル	1 2・1 3・1 4・1 5・1 6・1 7・1 8・1 9・2 0・ 2 1・2 2・2 3・2 4・2 5・2 6・2 7・2 8・2 9・ 3 0・3 1・3 5・3 6・3 7・3 8・3 9・4 0	
2		4 5・4 6・4 7・4 8・4 9・5 0・5 1・5 2・5 3・ 5 4・5 5・5 6・5 7・5 8・5 9・6 0・6 1・6 2・ 6 5・6 6・6 7・6 8・6 9	
3		7 2・7 3・7 5・7 6・7 7・7 8・7 9・8 0・8 1・ 8 2・8 3・8 5・8 6・8 7	
4		8 8・8 9・9 0・9 1・9 2・9 3・9 4・9 5・9 6・ 9 7・9 8・9 9・1 0 0・1 0 1・1 0 2・1 0 3・1 0 4	
5	ツェルニー 100番	1・2・3・4・5・6・7・8・9・10・11・12・ 13・14・16・17・18・19・21	
6		22・23・24・25・27・28・29・30・31・ 33・34・35・36・37・38	
7		40・41・42・43・46・47・ 48・50・52・53・61	
8	ツェルニー 30番	1・2・3・4・5	
9		6・7・8・9・10	
10		11・12・13・14・15	
11		16・17・18・19・20	
12		21・22・23・24・25	
13		26・27・28・29・30	
14		ツェルニー 40番以降	ツェルニー40番または50番、2ページ以上の曲

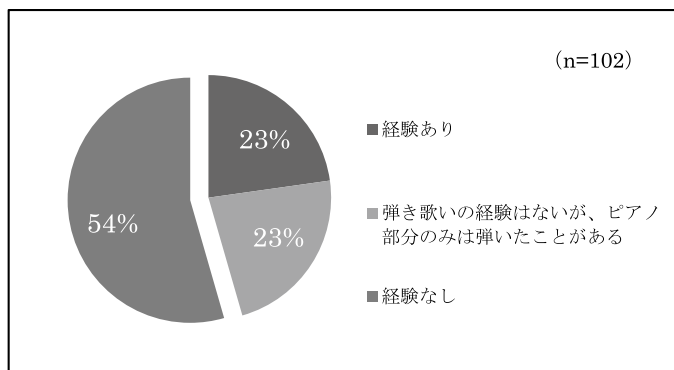
入学時における個人の能力差の大きいピアノ演奏技術において、この14段階グレードシステムは習熟度の遅れている学生にも、進んでいる学生に対しても、両者に適切な教育をすることの困難さを同時に満たしている。卒業時における単位習得のための最低ラインは4グレード合格(バイエル修了)を条件とし、学生は各々のレベルに合わせて該当グレードの学習曲順に学習しながら、演奏の基礎技術を高めていく。各々のグレードの決定方法については、まず学生の入学手続き時にピアノ進捗調査を実施し、進捗・経験年数・自宅に所有している鍵盤楽器の有無等を、自己申告により調査する。入学後、3回目の授業時までに各担当教員が個人の演奏レベル、練習サイクル、今後の見通しなどを含め検討し、「スタートグレード」を確定させることになっている。学生はこのカードを授業毎に持参し、合格ごとに学習曲に丸印を付記することで成果を可視化し、達成感と自己調整学習(self-regulated learning)のスキルを身に付けられるようにしている。

3. 14段階グレードシステムを活用した、弾き歌い学習方法の検討

本学ではこれまで、弾き歌い曲の学習は1年次後期、2年次前期、2年次後期の試験時に共通課題を課すことで学習していた。「カレーライスのうた」「山のワルツ」など、学生の技能レベルにかかわらず原曲での伴奏を原則とし、各試験の4週間前にこれらの共通課題が2～3曲発表されていた。試験当日の演奏直前に、くじ引きにより演奏曲が決定され、グレードの進んでいる学生は限られた時間の中で自身のレパートリーとできるよう学生同士で切磋琢磨し意義のあることであったが、グレード1や2の学生、いわゆる初学者層においては「試験まで1曲にかかりきりになってしまう」、「弾ける気がしない」、「劣等感ばかり感じる」などの心理的側面への影響も生じていた。また、弾き歌い曲のレパートリーが制限されてしまうことはかねてからの懸念事項であった。そこで、基礎技術習得から表現技術習得という段階を踏んだ教育を改め、全学生に対し1年次前期より(つまり、ピアノ未経験者である1グレードの学生に対しても、4月の授業時より)、音楽I(ピアノ)の授業内において弾き歌い技術の学習を平行して実施できるシステムの開発を試みた。

まず、学生の入学時における子どものうたの弾き歌い経験の有無は以下のとおりである。

図 1. 入学時における「子どもの歌」の弾き歌い経験



7割を超える学生が「弾き歌い」の経験がなく、養成課程の2年間にしか、現場に出る前の実践期間が無い現状が浮き彫りとなった。次に、これらの層が効率的かつ効果的に子どもの歌の弾き歌い技術を高めるために、段階を踏みながら学習を進めることを目的とし、14段階グレードシステムのグレード別に弾き歌いレベルを5つに分け、ピアノのグレードと弾き歌いレベルを紐付けた。これにより、1～2グレードの学生が学習しているバイエルの範囲でも、15番で二部形式、21番でアルベルティ・バスの伴奏型、36番で三部形式、49番ではすでにI, IV, Vの和音を経験する。しかしながら、65番までは全て高音部譜表のみで作曲されているため、「子どもの歌の弾き歌い」において左手で奏するような低音部譜表に触れるという経験の浅さも、この弾き歌い課題学習カードによってカバーできるようになった。

表 3. 名古屋柳城短期大学弾き歌い課題学習カード

弾き歌い レベル	曲目	ページ数	1年次 チェック欄	2年次 チェック欄	暗譜 チェック	試験曲 (○印)
A	チューリップ	98				
	ちょうちょう	97				
	とんぼのめがね	116				
	あまだれぼったん	109				
	しゃぼんだま	112				
	みずあそび	113				
B	かたつむり	108				
	やまのおんがくか	149				
	こぎつね	141				
	はをみがきましょう	74				
	まつぼっくり	119				
	にんげんっていいな	続 124				

グレードシステムを用いたピアノ演奏・表現向上の試み

C	とけいのうた	76				
	どんぐりころころ	118				
	ぞうさん	145				
	おばけなんてないさ	201				
	せんろはつづくよどこまでも	209				
	ゆりかごのうた	195				
	きのこ	続 212				
	ハッピーチルドレン	続 144				
	ぼくのミックスジュース	続 133				
アイスクリームのうた	続 110					
D	あめふりくまのこ	132				
	ふしぎなポケット	182				
	もみじ	122				
	あわてんぼうのサンタクロース	84				
	ともだちさんか	80				
	にじ	別紙				
	大きな古時計	続 114				
	さんぽ	続 104				
	まっかな秋	続 214				
E	やきいもグーチーパー	続 219				
	おはながわらった	104				
	ちいさいあきみつけた	228				
	コンコンクシャンのうた	124				
	とんでったバナナ	204				
	いちねんせいになったら	94				
	うたえバンバン	続 170				
	たのしいね	続 172				
	やまのワルツ	続 122				
まっかな秋	続 214					
Eレベル合格後 新たに増やした レパートリー						

選曲は、各グレードの学習曲で出てきた伴奏系を中心として、2年次の就職試験対策と、1年次の初回の実習（教育実習Ⅰ）が11月であることから、どのレベルにも秋の曲が必ず入るよう配置した。また、自身の該当グレードの課題曲を全て学習し、担当教員からチェックを受けた学生は次の弾き歌いレベル曲へ進むことができる。弾き歌いEレベルまで到達した学生には、自身で選んだ曲を書き込むことができる欄を設け、学習を継続できるようにしている。

また、本試験の評価においては弾き歌いレベルによる成績のねじれを避けるため、また教員同士の共通理解をはかるため、表4のとおり採点基準を設けた。学生へは初回授業のガイダンス時に告知し、基準点から加点や減点があることを伝えている。加点の要素例と

しては、歌声がよく通っていること、暗譜していること、表現力豊かであること等を挙げ、減点の要素としては、ミスにより流れが中断すること、歌声が聴こえないこと、「さんはい」「どうぞ」等の歌唱援助が不足していることを学生ならびに指導担当教員と申し合わせた。

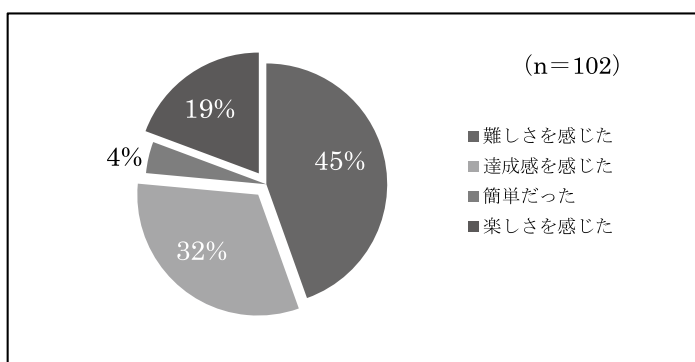
表4. 評価の基準点

弾き歌いレベル	スタートグレード	基準点
A、B	1～4	65
C	5～7	70
D	8～13	75
E	14	80

4. 結果と考察

弾き歌い課題学習カード（表3）は、名古屋柳城短期大学ピアノグレード課題学習カード（表2）の裏面に印刷されていることから、教則本で身につけた基礎技術が生かされているという意識が学生の中に高まり、授業内で積極的に弾き歌い曲のレパートリーを拡げようとする姿が見受けられた。また、試験時には初学者層である1～2グレードの学生においても暗譜で（教員を子どもに見立て、こちらを見ながら）、鍵盤や楽譜から視線を外して演奏する姿も複数みられた。これらの取り組みが、学生自身に与えた影響をはかるため、受講者アンケートを前期試験（音楽Iは通年科目のため、中間試験として実施）終了直後に実施した。調査項目は、1年次前期における弾き歌い曲の学習について「難しさを感じた」、「達成感を得た」、「簡単だった」、「楽しさを感じた」の4つの観点に最も近い心的状況の回答を求め、複数回答可とした。

図2. 心的状況の変化



全体の45%が弾き歌い曲に難しさを感じ、32%が達成感を、19%が楽しさを感じていた。さらに、難しさを感じたと答えた学生のうち20%は、同時に「達成感」と「楽しさ」も感じていることが明らかとなった。また、1～4グレードと5グレード以上の学生に分けて比較すると、グレードの低い学生の方が達成感を、グレードの高い学生の方が楽しさを見出していることが分かる。(図3、図4)

図3. 心的状況の変化 (1～4グレード)

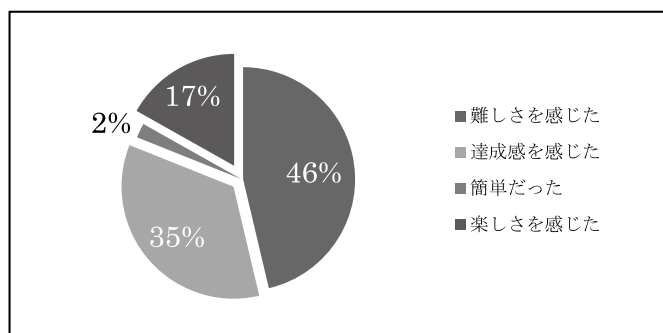
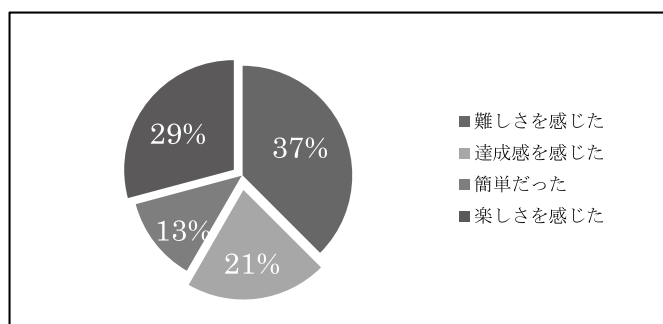


図4. 心的状況の変化 (5グレード)



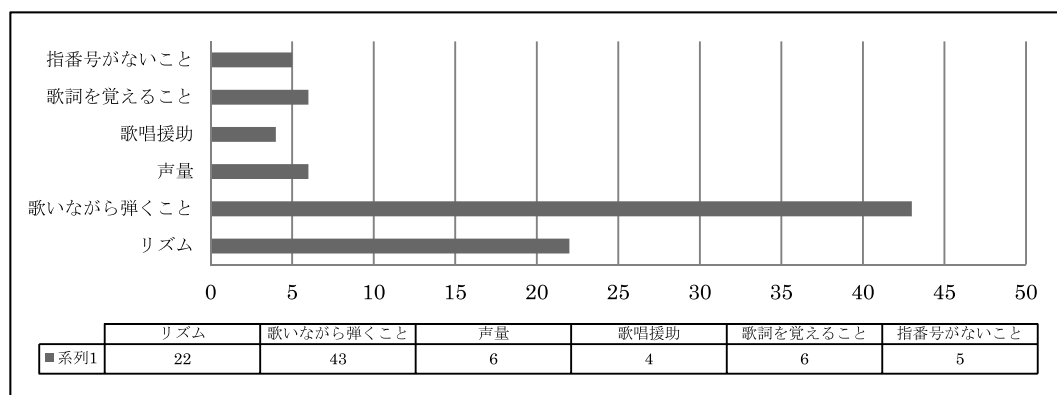
ここで明らかとなったのは、弾き歌い曲に対して感じる難しさは初学者層も熟練者層も大きな差はなく、同じ割合で初学者層も「達成感」や「楽しさ」を確かに感じているということと、ある時点でのピアノの技術の高低にかかわらず、いかに意欲的に学習できるかが重要であるということである。教員は、この心的状況を励まし、初学者層には自分にもできたという達成感を早い段階から経験させ、熟練者層には次々と伴奏の幅を拡げレパートリーが増えていくことの楽しさを実感させることが重要ではないか。

アルバード・バンデューラ Albert Bandura (1925-) によって提唱された心理学用語のひとつに、自己効力感 (Self-Efficacy) があるが、これは自分自身にある目標を達成する

能力があるという認知のことで、ピアノの演奏技術に困難を抱えやすい初学者層には特に、その認知が重要であると考えられる。吉村ら (2015) はこの自己効力感を高めるピアノ指導について研究しており、学生自ら進んでピアノの練習をし、積極的に取り組むことができる授業の検討を行った結果、特に初心者である学生には、この自己効力感を高めることが重要であることが分かっている。つまり、日々の学習（練習）を継続するためには授業内でいかに自信を付けさせ、課題を達成させ、楽しさを感じさせるかが重要な鍵を握っているということである。

最後に、弾き歌い曲の学習において学生が困難さを感じることもについても調査した。

図5. 弾き歌い曲学習時に困難を感じること



困難さについては、グレードにかかわらず「歌いながら弾くこと」と答える者が圧倒的に多かった。これは、ピアノの教則本のみでは習得できない部分であるため、弾き歌い曲を並行して学習することは大いに有効であると考えられる。また、リズムと答えた者は「右手でメロディーを奏しない両手伴奏時のリズム」や「歌詞の語数と、旋律のリズムが合わない時」に困難さを感じていた。

今後はこれらの問題を解決するための指導法を検討していくとともに、「楽しさ」や「達成感」が感じられる学習の動機付けについて、学生と幼児教育・保育現場のニーズに見合った、質の高いカリキュラムについての研究を続けていきたい。

本研究は、名古屋柳城短期大学奨励研究費の助成を受けたものです。

5. 参考文献

- 榎内光子、立本千寿子、齋藤節子(2011)「保育者養成校における音楽技能に関する研究—「学びの姿」のタイプを視点とした実態調査と指導のあり方の検討—」『徳島文理大学研究紀要』第 82 号 : 1-9 頁
- 田原昌子 (2014) 「子どもの表現のためのピアノ伴奏法Ⅰ—初級者を対象としたピアノ伴奏力養成について—」『プール学院大学紀要』第 55 号 : 123-137 頁
- (2015) 「子どもの表現のためのピアノ伴奏法Ⅱ—子どもの完成を育むピアノ伴奏力養成について—」『プール学院大学紀要』第 56 号 : 153-168 頁
- 吉村淳子、芝崎美和 (2015) 「保育者養成におけるピアノ指導について—学生の自己効力感に着目して—」『新見公立大学紀要』第 36 巻 : 59-66 頁
- (2016) 「自己効力感を高めるピアノ指導の検討—目標シート活用の試み—」『新見公立大学紀要』第 37 巻 : 71-76 頁
- 吉村真理子 (1993) 「発達に応じた環境を (乳幼児のための音楽教育)」『音楽教育学』日本音楽教育学会 第 23-2 号 : 49-52 頁

6. 楽譜資料

- 小林美実『こどものうた 200』東京 : チャイルド本社、2017 年。
- 『続こどものうた 200』東京 : チャイルド本社、2017 年。
- フェルディナント・バイエル『標準バイエルピアノ教則本』東京 : 全音楽譜出版社、2008 年。

Piano Performance and Expression Improvement with a Grade System : Consideration about Teaching Methods for Junior College Students Majoring in Nursery

Fuse, Erina*

保育者養成校におけるピアノの演奏技術に対する指導については、これまで様々な視点から教授方略 (Instructional Strategy) が練られてきた。無論、幼児教育・保育の場において子供の音楽表現を支える方法はピアノのみに限らないことは言うまでもないが、保育者の優れた音楽的技術は子供たちの豊かな音楽的環境のひとつであり、その手段としてピアノの基礎技術習得は欠かすことができない。しかしながら、限られた時間の中で教授しなければならないことをはじめとする多元的要因と、年々増加するピアノ初学者の割合に対する教授方法の難しさは近年ますます深刻化している。そこで本稿では、音楽の基礎演奏技術と表現技術を分け隔てることなく、同時進行的に習得するための教授方略を検討することを目的とし、効率的に、かつ、学生の学習意欲が高められながら達成される教授方略の可能性を探った。

14段階グレード制と子どもの歌の弾き歌い学習曲のレベル分けにより、初学者層や、ピアノ既修者で入学後に初めて子どもの歌の弾き歌い曲に触れる層が、それらを両立して効果的に学習成果を得られる教育システムを実践したところ、弾き歌い曲に対して感じる難しさは初学者層も熟練者層も大きな差はなく、同じ割合で初学者層も「達成感」や「楽しさ」を確かに感じながら技術を身に付けているということが分かった。つまり、ある時点でのピアノの技術の高低にかかわらず、いかに意欲的に学習できるかが重要であり、初学者層には自分にもできたという達成感を早い段階から経験させ、熟練者層には次々と伴奏表現の幅を拡げレパートリーが増えていくことの楽しさを実感させることが鍵を握っていることが明らかとなった。

キーワード：ピアノ、弾き歌い、達成感、楽しさ、学習成果

*Nagoya Ryujo Junior College

